

【氏名】川津 千佳

【所属大学院】東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】

『植民地期のインド軍 — インド化とナショナリズム』

“The Indian Army under British Raj : Indianisation and Nationalism”

【研究の目的】

軍隊は、イギリスによるインド植民地支配の大きな支えの一つであり、植民地期を通じてその最終的基盤であり続けた。しかし同時に、インド軍こそがイギリスにとって最大の潜在的権威でもあった。これは1857年のインド大反乱からも明らかである。ところが実際には、大反乱以降、少なくとも第二次世界大戦まで、インド軍内に反乱はほとんどなく、インドのナショナリズムが高まる中でも、むしろそれを直接的・間接的に抑圧する役割を担ってきた。しかし独立運動が全インド規模に拡大する中で、何故インド軍は政府への忠誠を維持し続けたのだろうか。一方、この疑問は、独立時にインド軍・パキスタン軍に分離はしたものの、新しいインド政府に軍が大きな混乱なく引き継がれたのはなぜか、という疑問を生じさせる。

これらの疑問に対し、本研究は特に、植民地期のインド軍における「インド化」(Indianisation)、つまりイギリスによって独占されていた将校階級へのインド人の参入とその割合の増加、に焦点を当てて考察する。イギリスは、インド軍のインド化の進展は、植民地支配を確実に危機にさらすものであると明らかに認識していた。インド化は、イギリスのインド支配の基盤としてのインド軍の役割や性質の根本的变化につながる問題だったのである。

【研究の内容・方法】

本研究では、インド化をめぐる議論、過程、そのもたらした影響、またその過程で養成されたインド人将校について検討する。そしてそこから、イギリスによるインド植民地支配の基盤から、独立時には新生インド政府にスムーズに引き継がれることになった、インド軍の変化について考察していく。そしてそれにより、ガンディー主義的なナショナリズム運動の分析が中心であった植民地期の南アジアの歴史を新たな側面から捉えなおすことができる、と期待している。

これまでに、この研究の一環として、2年間インドのジャワハルラル・ネルー大学(Jawaharlal Nehru University)に留学をした。2年間の留学中、デリーのインド国立図書

館(National Archives of India)や、ネルー記念図書館(Nehru Memorial Museum and Library)での史料収集を中心に、研究を進めてきた。しかしインドでは、多くの軍事関係の公文書を保有するインド防衛省の歴史部門資料室(Historical Section, Ministry of Defence, Government of India)での調査は、外国人であるという理由で許可されなかった。そのため、本研究完成のための史料として、中心となるべき軍事関係の公文書収集が未だ不十分であった。そこで、インドでの調査に加えて、イギリスでの調査を行う必要が生じた。具体的には、軍事関係の公文書が整理された状態で保存されている、イギリス・ロンドンの大英図書室(British Library)における史料収集、またイギリスの国立公文書館(Public Record Office)での、War Office Papers, Cabinet Office Papers などの史料収集などの調査を続けている。

【結論・考察】

インド軍に関する従来の研究は、一部の例外を除き、イギリスの軍事政策ばかりを扱うなど、支配者側からの歴史としてのみ描かれる傾向がある。しかし、本研究で、おそらく最も植民地主義的な訓練、管理、監視を受けたであろう現地人であるインド軍内のインド人を考察することで、従来の研究とは異なる、統治者と被統治者との関わりに重点を置いたインド軍の研究が可能になると考えている。

また、インド化を扱う既存研究では、インド化の過程で養成されたインド人将校は、イギリスが政策や教育を行う対象として、もしくはインド化の進展を示す数字としてのみ描かれてきた。しかし本研究では、彼らの軍事教育機関や軍における経験、進路として軍を志望した動機、軍やイギリスへの忠誠や反抗、彼らの分離独立における体験など、彼ら自身の経験、感情、戦略にも焦点を当てて考察をした。